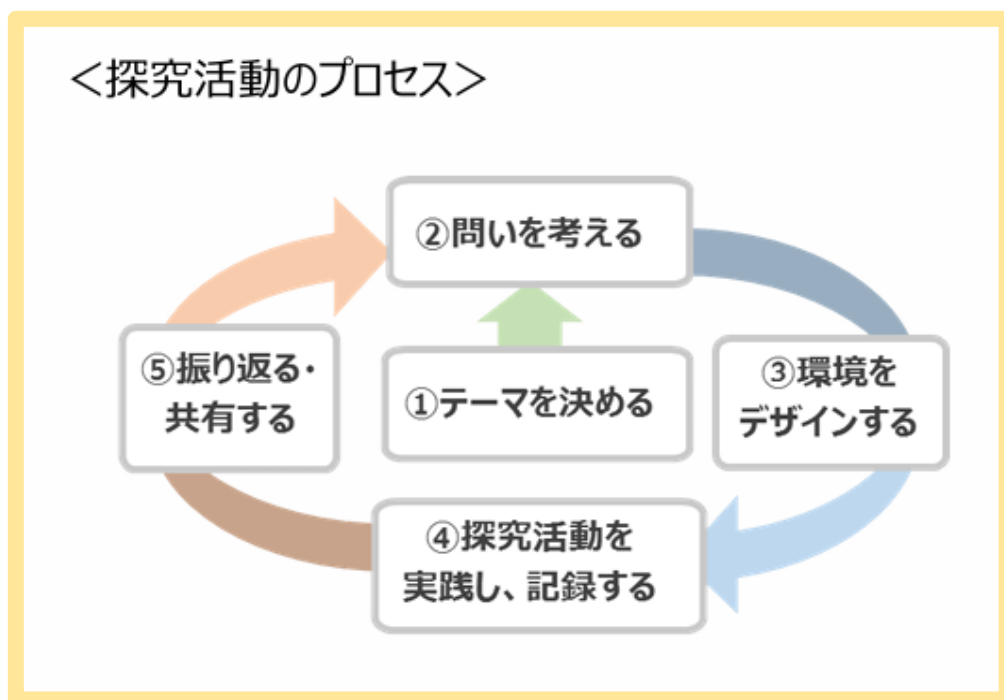


東京都「すくわくプログラム推進事業」の実践

2024（令和6）年度に、東京都が推奨する「すくわくプログラム」の実践をまとめました。

子ども達が遊びの中で興味や関心を持ったことをテーマに、探求や研究をした活動です。年齢によって、興味の持ち方や関心の向け方、活動のプロセスも様々ですが、アートによる表現に取り組んできました。乳児は五感を刺激する感触遊びから形へ、幼児は気づきや発見を造形によって表す試みです。年長児は目や耳から取り込んだ言葉（言語）の情報を描画にして、かるた作りへと発展していきました。ホームページやInstagram、Facebook などでも随時、配信してまいりました。一年間の実践から活動の一部にはなりますが、どうぞご覧ください。

子どもの「すくすく×わくわく」を応援するプログラム



2024（令和6）年度に取り組みました「とうきょうすくわくプログラム」の実施報告です。

◆実践内容（テーマ）

- | | |
|------------------------------------|---------|
| ①アート・ラボ～子どもの表現となるアート活動～「ケーキプロジェクト」 | 5 歳児 |
| ②自然との関り 「栽培、収穫、味覚の研究」 | 5 歳児 |
| ③アトラボ～生き物との関り～「メダカの飼育と環境」 | 5 歳児 |
| ④アトラボ～感触遊び～ 「乳児の遊びと造形表現」 | 0 ～ 2 歳 |
| ⑤アトラボ～子どもの表現となるアート活動～ 「幼児の造形表現」 | 3 ～ 5 歳 |
| ⑥アトラボ～文字と遊ぶ～ ことばのプロジェクト | 5 歳児 |

①アート・ラボ～子どもの表現となるアート活動～「ケーキプロジェクト」5歳児

◆活動内容

毎月の誕生会に、年長児が造形によりケーキを作ってお祝いをしています。

「ケーキプロジェクト」と称して、年長児が少人数のグループで取り組む活動です。各々デザイン画を描き、どんなケーキにするかを話し合います。形や素材などお互いの意見を出し合いながら、イメージを合わせてケーキの協同制作を行っていくものです。誕生会当日、制作したメンバーがケーキを会場に運び入れ、ケーキの名前やどのように作られたか等のポイントを紹介してくれます。

担任以外の保育士が交代で担当することで、毎回新たな出会いとシチュエーションが生まれ、それまで見ていなかった子どもの一面が現れることもあります。子ども達の考えを出し合って「誕生児に喜んでもらえるお祝いのケーキ」は、どんなものかを探っていきました。季節感も取り込み、様々な素材を活用して試行錯誤しながら制作します。意見の違いなど葛藤を通して対話する経験にもなりました。

アトリエという特別な空間で行うことで、集中して活動することができます。発言がしやすく他児の声に耳を傾けやすい環境です。ケーキプロジェクトは、仕組みとして定着しており期待を持って臨めること、3ヶ月継続して同じメンバーで行うことで、見通しを持って取り組みことができる実践です。

話し合いの途中で意見が硬直することなどありましたが、保育者が誘導するのではなく、子ども達自身が考えを導き出せるように、考えを整理して伝えたり、提案として一つの考えを提示したり、イメージが広がるように環境設定や素材の用意をするなどしてサポートしていきました。

年長児であることから発言が活発で言語化できるため、担当保育者がメモと写真、動画等で記録をして、プロセスをたどるドキュメンテーションを作成します。



ドキュメンテーションの一部

誕生会後は、担当の保育者から職員会議で実践報告してもらい振返ります。個別の子どもの成長なども分かち合う機会となります。ドキュメンテーションは、全職員が閲覧することで、子どもの関心や対話の在

り方、保育者の発見が分かるようになっていきます。読み直すことで、新たな発見もあります。ケーキはドキュメンテーションと共にエントランスに展示します。全園児と保護者が目にすることができ、会話のきっかけになったり、感想をよせてもらったりしています。



② 自然との関り 「栽培、収穫、味覚の研究」

5 歳児

◆活動内容

畑での栽培と収穫をボランティアスタッフと年長児が行なっています。春のジャガイモづくりは、一昨年から続く毒ジャガイモの子孫でもあり、古いジャガイモから収穫できるかを探った研究になりました。夏の栽培では、猛暑が続く中、カボチャの生育がどのように変化していくのか、自然環境との関りから作物の収穫を考える機会にもなりました。秋にはサツマイモ、冬には大根やカブなど大きく育つ野菜を収穫し、サツマイモや大根の色味や重さ、根の生え方など特徴についても研究しました。

また、屋上にはブドウやイチジク、ピワ、ブルーベリーなど実のなる木がたくさんあり、子ども達も実りを楽しみに観察し、ボランティアスタッフのはたらきかけで、市販の果物と屋上のブドウの糖度計で計測し、「果物の甘さ」にも関心を持ちました。

年長クラスでは、年間を通して栽培するにあたり水やり当番など交代で担当制にすることで、お互いに声を掛け合い作物の生長を観察しながら発見を伝え合っていました。

定期的にボランティアスタッフが関わって、植え込みや収穫を行い、その度に写真と文章で記録しドキュメンテーションとして掲示をしました。また、Instagramでの配信は、そのままアーカイブライリィとして記録化されています。

毎月のクラスの月案会議で、畑の活動を振り返りました。子ども達の関心事や興味の広がりについて考察し、翌月の活動へつなげていくようにしました。毎年、5歳児が中心となって栽培と収穫するので、他のクラスの子ども達の目にも留まり、次は自分たちがやるという期待を高めていきました。



③ アートラボ～生き物との関り～「メダカの飼育と環境」

5歳児

◆活動内容

「めだかがっこう」の歌をきっかけに、年長児クラスでメダカを飼うことになりました。餌をあげるなど飼育していく中で愛着も沸き、繁殖期になると卵が付いていることに気づいて卵を別の水槽に入れるなどして飼育していきます。メダカの卵のふ化の観察をしていくなかで、その姿の変化にも関心を持っていました。「メダカはどんな気持ちだろう？」と、メダカの心情にも興味を持ち、「メダカの住む環境はどのようなのが良いのか」を探求していきました。ラフのデザイン画から紙粘土での模型作りをし、アート展では、「メダカの街のデザイン」と題して、陶芸粘土で素焼きした作品を実際にメダカの水槽に入れて展示しました。クラス全体でメダカの環境について必要な遊具や家などを考えて一つの街を作るプロジェクトとなりました。

また、卒園に向けてメダカに親しんでもらおうとエントランスに水槽を置き、乳児を含め在園児に見えるようにしたところ、他のクラスの子ども達や保護者が夢中になって観る姿がありました。飼育は年中児に

引き継ぐことにして、飼い方の説明もしました。

水槽は、皆が見える所に置いたことで日々観察する姿がありました。「大きくなって」「こっちは小さい」など、お互いの気づいたことを言葉にしてやり取りしていました。水槽の管理を当番化することで、お世話することを楽しみにしていました。朝のミーティングタイムで、ホワイトボードを活用してメダカの状況の確認をするなど、子ども同士で情報をシェアできるようにしたことで、クラス全体で大切に育てる気持ちを育んでいきました。

メダカの住処についてイメージを持ったことから、デザイン画を起こすなど子どもの表現がそのまま記録にもなりました。クラス一斉の活動ではなく、興味を持った子ども達から少人数で進めたことで、それぞれの考えを聴くこともできました。クラスの月案会議の中で、子ども達の興味や関心、作品進捗状況などを確認して翌月の活動へとつなげていき、年に1度のアート展では、「メダカの住処」として作品化したものを実際のメダカと合わせて展示したところ、展示の前で自ら積極的に保護者へ説明するなど言葉によるやりとりも聞かれました。

メダカという小さな生き物と関わることで、命の大切さや愛おしさを体験することができました。メダカだけでなく、生き物を大切にすることを考える活動となったと思います。



活動内容

乳児がいろいろな素材に触れて遊べるように、自然素材の他、様々な素材を用意しました。モノと出会い、関わる中で五感を刺激する活動を行っていききました。水や砂、絵の具や紙粘土といった感触を味わいながら探求心を深めていき、モノへの興味を広げていききました。

また、日本古来の「こどもの日」「七夕」「クリスマス」「節分」「ひな祭り」といった伝統的な行事にちなんで、様々な素材に触れて遊び、行事とつなげて各家庭へも行事を伝承することを大切にしてきました。作品化する時には、子どものモノとの関りが分かるように配慮し、一人ひとりのプロセスが分かるように個別で取り組みました。

年に1回のアート展では、子ども達が興味や関心のあることをテーマとし、素材との関りを探って遊びを展開していききました。作品化することを目的とせず、感覚を刺激しながらモノとどのように関るかに視点を置き、そのモノを感じる心を大切にする活動を行っていった実践です。

乳児の感覚遊びをモノとの出会いと位置づけ、初めて目にするモノ、継続して遊んできたモノのとの関り方の違いにも着目し、子ども一人ひとりがモノとどのように関わるのかを観察し、モノとの対話を探っていききました。特に、0歳児はモノとの関りにおいては感情を表情や仕草で表現するため、子どもが主体的にモノと関わるのを見守りつつ、共感的な声掛けを行ないながら遊びの発展を導いていききました。自然物の他、紙粘土や塩などクラスで継続的に活用した素材は、子ども達の関わり方にも積極的に手を伸ばすなど変化が見られました。「木のアトリエ」として設けた小部屋では、少人数で光の遊びなどを実施して活動を広げていききました。

行事にちなんだ制作では、毎月のアトリエ会で子どもの様子を職員間で共有し、分かち合いながら次の活動へつなげていききました。

夢中になってモノと関り遊ぶ姿を写真や文章で記録していき、年に1回のアート展では、個々のプロセスをドキュメンテーションとして作品と共に展示しました。保護者と共に作品とドキュメンテーションでそのプロセスを鑑賞することで、子ども理解を深めることもできました。ドキュメンテーションを通して、気づいたことを職員間でも伝え合い、子どもの気づきや発想を分かち合うこともできました。







⑤ アートラボ～子どもの表現となるアート活動～ 「幼児の造形表現」 3～5歳

◆活動内容

日本古来の伝統行事にちなんで、「こどもの日」「七夕」「クリスマス」「節分」「ひな祭り」の制作を行いました。その行事の意味や由来を知り、その行事に込められた願いなどを様々な素材を活かして表現しました。作ることを楽しみ、自分なりの考えが表現できるように、少人数ずつで制作活動を行いました。アート展では、子ども達が興味や関心のあることからテーマを設け、クラスごとに表現活動に取り組んでいます。アトリエにある多種多様な素材の中から、イメージにふさわしい素材を選び、独自の表現につなげていきました。

3歳児クラスでは、青虫やヒマワリを育てて、空へ向かって伸びるひまわりや飛び立つ蝶から、屋上園庭から望む「空」をテーマに展開しました。4歳児クラスは、お医者さんごっこが流行ったことから、学校薬剤師さんに薬についてお話しをしてもらい、「こんなお薬があったら」をイメージして薬づくりを行いました。オリジナルの薬は「元気になる薬」「ラブが止まらなくなる薬」などユニークなものばかりでした。5歳児クラスの興味や関心は多岐に渡りますが、ボードゲームに夢中になる姿が多かったことから、オリジナルのボードゲームを各自が作成して実際に遊ぶことにしました。ルールも各自で決めて、バラエティー豊かなゲームが作られていきました。

それぞれのプロセスをドキュメンテーションとして個々の記録として残していきました。精度の高い作品を作ることを目的とせず、イメージを広げて、ふさわしいと思う素材を選び、その素材の特徴を活かして制作していきました。お互いの作品に刺激を受け合いながら工夫して作り上げていきました。

個々の考えが十分に反映された作品となるよう、少人数で行い子ども同士の会話も楽しみながら進めました。アトリエでの制作の他、屋上園庭やテラスなどその内容に合った環境で、柔軟に活動できるようにしました。

テーマに対して強く興味のある子ども達から活動を始めることで、興味のなかった子ども達も次第に関心を示すようになり、クラス全体へと広がっていきました。子どもから子どもへの声掛けも多く、楽しい

さや面白さが伝わっていきました。

写真と動画、文章などでプロセスを記録したドキュメンテーションと作品そのものが記録となり、子どもの考えや気づきを後から聞き取ることができ、保護者とも共有することもできました。

毎月のクラスの月案会議やアトリエ会で、活動の内容を職員間でシェアし、次への活動へつなげていきました。テーマを継続しつつ新たな展開など子ども達の興味関心に合わせて考えていくことができました。





◆活動内容

年長児は文字に関心を持ち、文字を書いて伝えようとする機会も増えていきます。イタリア人のアトリエ専任スタッフ（アトリエスタ）を通してイタリア語に関心を示すようになり、日本語とつなげた発想がとてユニークでもありました。そのプロセスを可視化するために、描画などの表現活動へつなげて、言葉の研究をしていきます。伝達ツールとしての文字だけでなく、抽象画として文字を捉えて親しむ面白さも体験しながら、イタリア語の音の響きでイメージする日本語など、独創的な発想で文字をとらえる幼児の姿がとても興味深い実践です。

アート展では、園児だけではなく保護者を巻き込んで、イタリア語を文字の綴りとして目にし、耳から発音として聞き、家族で日本語の漢字一文字をイメージするワークショップも開催しました。目から入ってきた文字から空想を広げ、表現する面白さを活動にしたユニークな実践となり、これまでにない活動となりました。文字の短冊は、エントランスに展示して園児や保護者が楽しめるようにしています。

イタリア人アトリエスタの会話から、イタリア語としてではなく、聴きなれない言語として興味を抱いた数人の子ども達から活動を行っていききました。青虫をイタリア語で「プルコ」と発すると「ブロッコリー？」と、身近な日本語に置き換えてイメージしたことから、アトリエスタはブロッコリーを用意して、実際の青虫とどのように違うのかを探っていききました。観察力を高めるために、ルーペやマイクروسコープカメラなどを用いて、細かなところも描画に起こしていききました。青虫の描画では、プロジェクターを活用し色を詳しく見るなど表現力を高めていききました。アトリエスタは、色や形を良く見て描画に反映するよう声掛けをし、子ども自身の発見を共有して尊重しながら活動を行っていききました。実際の虫の色や模様を観察し描画に起こすことで探求心が生まれ、研究活動を楽しんでいました。こうした活動の環境を整えられるように、職員が協力して活動を支えました。

動画や画像の他に、発言をメモに残すなどしましたが、園内の随所に子どもの描画や文字などをドキュメンテーションとして展示して、その活動が園児や保護者、他の職員へも共有できるようにしました。

アトリエスタによる職員研修も実施し、子どもと同じような活動を実際に行うなどして学びを深めました。基本的な子どもの捉え方、環境設定など子どもが何に興味を抱いているのか、適切な環境構成はどういったものかを話し合いながら進めていくことができました。

アトリエスタの「園内全てがアトリエ」という観点から、子ども達との探求・研究をドキュメンテーション化して、園のいたるところに展示したことで、園児と保護者、地域や関係者とも共有していくことができ、子どもの持つ能力を発信することで、園の大切にしていることも皆が意識できるようになりました。園全体をアトリエ化することで、職員の子どもの研究・探求の意識が高まり、新たな興味と関心に気づいて、環境設定や活動の内容を考えられるようになってきています。

